

4 . 明治後期における「一高野球」像の再検討

- 一高内外の教育をめぐる状況に着目して -

中村 哲也 (社会学研究科博士後期課程)

はじめに

1890 (明治 23) 年から 1904 (明治 37) 年にかけて、旧制第一高等学校 (高等中学校時代も含む。以下、一高) の校友会野球部は、自他共に認める球界の盟主であった。俗にいう「一高時代」である。この間一高野球部は、近隣の諸学校を相次いで破るだけでなく、アメリカ人チーム横浜倶楽部 (以下、横浜外人) と日本初の国際試合を戦ってこれに勝利するなど、輝かしい実績を残した。

当時の一高野球部を取りあげた文献は、体育・スポーツ史研究の専門書のみならず、野球史関連の一般書も含めて多く存在するが、そこではきわめて画一的な一高野球像が提示されている。すなわち、「優勝劣敗の勝利至上主義」、技術以上に精神の鍛錬が重視される「精神主義」、野球を一高精神の発露の場、校風の振起を担うものとする「集団主義」を「一高野球」の特徴とし²、これを日本野球の原型ないし起源と位置付けるものである³。こうした一高野球像に対して、言説分析的手法により再検討を迫ったのが坂上康博である。坂上によると、明治後期の武士道的な野球言説は、「創られた伝統」としての武士道論が社会に広まり、武道が奨励される一方で野球が批判にさらされるなかで、野球の正当性を主張するためになされたものである⁴。坂上の議論を前提とすれば、武士や武道と日本の野球とのつながりが自明ではない以上、武士道から派生して発見されてきた日本の野球の諸特徴もまた、再検討されねばならない。

そこで本論文は、勝利至上主義に焦点を当てて「一高野球」像を再検討していくこととする。先行研究では、一高野球部を勝利至上主義とする根拠として、「何としても勝つ、勝たねばならぬ」「負けた者は徹頭徹尾劣敗者たる屈辱を甘受せねばならぬ」という中野武二の考えや⁵、守山恒太郎に代

表される猛烈な練習⁶、さらにはインブリー事件 (後述) を「勝てる見込みのない試合を」「問題にならない瑣事にすりかえて、“負け”ないですませた」⁷、ということが挙げられている。

これらのエピソードにみられるように、一高の野球部員が野球に熱中し、勝利を熱烈に追い求めていたことは確かである。しかし、一高野球部員をスポーツをする存在としてのみとらえるのではなく、一高の学生として、明治後期のトップエリートの子供としてとらえ、その側面から彼らの意識や行動を見ると、勝利至上主義とはいえない側面が見えてくる。本論文は「一高時代」を中心に、一高における教育の実態や、高等学校教育をめぐる社会状況に着目した。それにより、学校生活と野球部の活動に関する選手たちの意識や、一高野球部がもつ限界を明らかにし、通説の「一高野球部」像を批判的に検討していく。

さらに先行研究では、一高野球部衰退の要因として、日清戦争後における青年の思潮の変化、すなわち集団主義批判と個人主義の高まりがあげられてきた⁸。本論文ではこれに加えて、一高をめぐる教育社会の状況、とりわけ入試をめぐる変化に着目することで、一高野球部衰退のもうひとつの要因を明らかにしていくこととする。

本論文は対象を一高に限定しているが、教育をめぐる社会状況を基盤にして学生スポーツ史を見ることで、社会や選手たちの意識の通時的な変化を同一の視角でとらえることが可能になると筆者は考えている。本論文は、そうした学生スポーツ史研究の出発点と位置づけたい。

1 . 第一高等学校の成立と学業

1877 (明治 10) 年、日本初の大学として東京大学が成立した。それに合わせて、大学での「専

門学科二昇進スヘキ生徒二階梯ヲアタヘ予備学ヲ教授スル」ために、東京大学予備門が設立された⁹。設立当初、東京大学予備門は高等教育機関に位置づけられていたが、1886（明治 19）年の中学校令で高等中学校として中等教育機関に組み込まれ、校名も第一高等中学校と変更された¹⁰。しかし1894（明治 27）年の高等学校令で再び高等教育機関に組み込まれ、第一高等学校へと改称した（以下、高等学校はすべて旧制高等学校を指す）¹¹。

ただ、明治期に高等教育機関に進学できる学生はきわめて少数であった。一高が成立した 1886（明治 19）年の高等学校生徒数はわずか 1,500 人で、それは当該年齢人口の 0.4% にすぎなかった。明治期をつうじて高等学校は徐々に拡充されていったものの、1910（明治 43）年の時点でも同年齢の 1.0% しか高等学校に進学することはできなかった¹²。森有礼の言を借りれば、高等学校の学生は「後来日本ノ権力ヲ掌握スルモノ」、ないしは「上流ノ人」であり、高等学校はそうした「社会多数ノ思想ヲ左右スルニ足ルヘキモノヲ養成スル所」であった¹³。一高などの高等学校は、将来の国家や社会で重要な役割を果たすことを期待された少数のトップエリートの養成機関であった。

一高は、高等学校のなかでも特に入試の難度が高かったことで知られているが、大学の授業で必要とされる専門知識や語学の素養を身につけるために、入学後の教育も厳しく行われた。1886（明治 19）年に定められた「高等中学校ノ学科及其程度」では、第一・第二外国語、国語及漢文、ラテン語、地理、歴史、数学、動物及植物、地質及鉱物、物理、化学、天文、理財学、哲学、図画、力学、測量、体操から授業が編成され、週に 26 - 30 時間も行われた¹⁴。

高等学校では、1 年間に 3 回試験が行われ、そこで点数が悪いと落第、2 年続けて落第すると退学となった。試験に関するデータは少ないが、1889（明治 22）年の一高の学年試験は 1,105 名が受験して合格者は 871 名（78.8%）、すなわち 5 人に 1 人強が落第した計算になる¹⁵。1902（明治 35）年に一高生となった安倍能成の自伝によると、

安倍が 2 年の時にクラスで 17 人が落第し、安倍もその一人となった。安倍は、藤村操の自殺が「組全体に動揺とショックを与えて、学科を勉強する気持が薄れて来た」ことを挙げているが¹⁶、一高における学業の怠慢は即落第へとつながるものであった。経済的な理由による退学や、衛生上の問題から健康を害するものが多いこともあって、1887（明治 20）年に一高に入学した生徒のうち、最短の修業年限 5 年で卒業した者は 43% にすぎなかった¹⁷。こうした学業の状況を念頭に置きつつ、一高野球部の活動を見ていくことにしよう。

2. 一高野球部と「一高野球」の成立

1872（明治 5）年、東京第一番中学校教師 Horace Wilson が日本に野球を持ち込み、以後お雇い外国人教師のいる学校を中心にして、課外の余暇活動として野球が行われるようになっていった。1878（明治 11）年には、アメリカから帰国した平岡熙が新橋アスレックスを設立し、明治 10 年代における日本野球の中心となった。同じころ、東京大学・東京大学予備門、駒場農学校、工部大学、慶応義塾、明治学院など東京にある高等教育機関で野球チームが相次いで結成され、練習や試合などが行われるようになっていった。ただ、この当時は遊び仲間から「常連」となったものが中心に活動を行っており、学校の公認や経済的援助などのないインフォーマルな集団であった¹⁸。

一高にも次第に野球の常連の学生が生まれ、そのなかには新橋アスレックスから技術指導やルールについて説明を受ける学生もいた¹⁹。しかし、明治 10 年代から 20 年代初頭においては、レクリエーションや友人との親睦を深める側面が強く、試合の勝敗はさほど重視されてはいなかった。

こうした状況が大きく変化するきっかけとなったのが、1890（明治 23）年の自治寮・校友会の成立とインブリー事件であった。1890（明治 23）年に一高教頭木下広次は、学生の歪風を抑制して徳義を養成し、自主・自律の能力を高めることを目的として寄宿寮を設立し、ここを学生の自治に

よって運営することを宣言した。木下の宣言に呼応して、赤沼金三郎を中心とした学生からも主体的に自治を形成する動きが生まれ、学生たちも自治の担い手を育成するためにスポーツを重視するようになっていった²⁰。

そして同年 10 月に校友会が結成されると、文芸部を除く 8 部すべてが野球などの運動部で占められた。校友会の設立によって野球部は正式に一高を代表することとなり、その活動に校友会から経済的支援が与えられるようになった²¹。

インブリー事件は、同年 5 月に起こった。一高校庭で行われていた一高対明治学院の試合で、一高がリードされる展開のなか、明治学院のアメリカ人神学講師インブリーが一高の垣根を越えて校内に入ってきた。これに怒った一高生がインブリーに投石し(殴打説もある)負傷させたのである。この事件により試合が中止となっただけでなく、一高や日本政府は国際問題にまで発展することを危惧する状況となった。事件そのものは一高生とインブリーとの和解により決着したものの、このことは野球部員をはじめとした一高生のプライドを刺激し、野球部員は明治学院に「復仇」するため猛練習に励んだ。そして 11 月の再戦で 26 対 2 という大差で勝利を収めたのである。これ以降も一高はライバルチームを次々と破って球界の覇権を握ったため、「一高時代」と呼ばれることになる。その間、一高野球部の対外試合の勝率は 8 割を超え、日本初の国際試合に勝利するなど輝かしい実績を収め、その名を全国にとどろかせた。

それでは、当時の一高の野球部員たちはどのような意識で野球を行っていたのであろうか。上述したように、1890(明治 23)年以前の段階では、試合での勝利により楽しむことが重視されており、部員も他部との掛け持ちが多かった。しかし、インブリー事件後はその様相が一変する。部員たちは明治学院への「復仇」を目的として「一意奮励」練習に励んだ。特にエースの福島金馬は「夏季休暇を通し一日も休せず」「腕を練」り、翌年からは summer party と銘打たれて夏期休暇中の恒例行事となった²²。

「校八即ち我家ナリ〔。〕校名八即ち我名ナリ〔。〕校威一点ノ織塵ヲモ假ス勿レ」という一高生としてのプライドが前面に押し出され、そのプライドを守るためにも対外試合で勝利することが重視された。そのとき野球は「球八弄スルカ為メニ非ラスシテ鬱勃タル胸中一片ノ気ヲ球ニ托シテ外ニ表示スルノ具」とされたのである²³。以後、一高野球部では技術以上に精神面を重視する猛練習が行われるようになり、形式的な「伝統」として受け継がれていった。

一高生たちは、トップエリートの予備軍であったため、自らが国家を代表するという意識も強かった。例えば、1896(明治 29)年の横浜外人に対する勝利は「単に我校の勝」ではなく「邦人の勝」とされた。それを裏付けるかのように、新聞で一高の勝利が伝えられると、全国各地の学校から祝電が届けられた²⁴。

校友会の成立とインブリー事件によって、野球部員たちは正式に一高を代表することとなった。一高野球部の選手たちは、国家を代表する一高生としてのプライドを社会に顕示するために、対外試合での勝利を熱心に追い求め、猛練習を行うようになっていった。校友たちもその様子を見守るだけでなく、試合の際には団結して野球部を応援することとなった。こうした勝利の追及と精神主義的な猛練習が結合した野球、いわゆる「一高野球」が成立することとなったのである。それでは、彼らの野球に対する態度は勝利至上主義といえるものであったのか。次節以下で検討していくことにしよう。

3. 野球と学業の両立

1890(明治 23)年以後、一高の野球部員たちは、対外試合での勝利をめざして練習に励むこととなった。しかし上述のとおり、一高は大学で必要な語学や専門知識を教授するための学校で、授業の内容が多岐にわたり、難解なものも多かった。試験も厳格に行われたため、一高生にとって試験勉強はきわめて重要で、「最も恐るべく、最も憂ふ

べき」存在であった。それゆえ、普段は「破帽弊衣、磊落不羈を以て自ら標置せる、一高男子なる者も」「試験前日」となると、撃剣道場や柔道場に人影はなく、「広き^マクラウド^マ上」に「一人のバットを手にする者」もいなくなってしまう。そのころ「寄宿寮内」は「寂として声なく、蕭々たる電灯の下、抄書堆裡に空しく呻吟する者皆然り」という状況であった²⁵。運動部員も含めて、試験前の一高生たちにスポーツをする余裕などなく、寄宿寮内で必死に勉強しなければならなかったのである。それゆえ試験が終わり、晴れてスポーツをすることができるようになった日には、「午前第二学期試業終了、筆は直ちにバットに代へられつ、長く鬱結したりし心頓みに晴れ渡れる心地し、球取り損ねて『勉強シタカラナ』と断るもをかし」と解放感と喜びに満ちた野球部員の心境が語られている²⁶。

自己のプライドを誇示するために一高生たちは野球をはじめとしたスポーツに熱心に取り組んだため、野球部員のなかには「お前は学校に何しに來たんだ、ベースボールをやりに来たか、学問をする気があるのか無いのかと先生に叱られ」たり²⁷、父親から「屢々、毬投げばかりやつて勉強を怠つてあちやいかん、と叱言を蒙」ったりする者もいた²⁸。教師や親だけでなく、学生からも次のようにスポーツに熱中する生徒を戒める意見があった。

抑も運動の体育に資するは更にもいはず、頭脳をクリヤーにする等に於て較著の力あるは炳乎云ふの要なく、従て学途者に必須なる亦論亡し、而れども学途者の運動に於けるは力士の相撲に於ける関係にあらず、力士一生の職や即ち相撲に在り、学途者一生の職や深遠高大、到底回向院にあらずして他山に在り、他山に在るか故に運動を輕視すべしといふに非るも、煎ずるに運動の従にして主にあらざるは理の睹易き所

²⁹

一高では選手のみならず一般の校友も野球部

の活動に注目し、試合では熱心な応援を繰り広げていた。しかし、一高生は力士のようにスポーツを「一生の職」にするものではない以上、スポーツはあくまで「従」とする認識が一高生のなかに存在していたのである。

1893(明治26)年6月、「学年試業の宣告に、運動場は聞として声なく、人々試験の準備に余念なき」ある日、慶応義塾野球部より試合の申し込みが舞い込む³⁰。それを受けて野球部の「理事は当惑」する。「先月以来霖雨に蝨し球を手にはせざる者已に十数日、且つ部員悉く〔試験の〕準備に暇を惜しむの時」だったからである。しかし、一高野球部は前年6月に青山英和学院と試合をして以降、試合の申込を拒否され続けたため、「外敵を熱望して」もいた。結局、「試験前に人選出来兼候へども、なまけ者共を驅り催ふし候て御相手仕候はん」と返書し、青井鉞男や五来欣造ら「なまけ者」が慶応義塾と試合を行った。結果は11対10で一高が敗れ、2年間続いた連勝記録もここで途絶えることとなった。

この結果に「なまけ者」を含む野球部の選手たちは、「敵を侮つて爰に至る、慙愧出づる所を知らず」、「先輩苦心の賜」である「部名」を「一朝にして是を毀つ」たことを強く後悔、反省する。選手たちは「匂を出てずして恥を雪」ぐことを欲するが、それには大きな問題があった。ひとつは「試業已明日に起り延いて全週に涉らんとす」るため「何の時を以て練習せんとする」かということであり、もうひとつは、試験が終わって夏休みに入ると旅行や帰省で校友が「四散」してしまうため、「諸君果たして誰れと共に凱歌を歌奏せんとするや」という問題である。すぐにでも慶応義塾に雪辱することを望みつつも、練習時間と試合日程が大きな問題となったのである。

部員たちによる合議の結果、慶応義塾との再戦は試験終了当日の午後1時半から行うこととし、練習は「毎夕食後二時間を以てせんとす」ることとなった。選手たちにとって「此数日間は実に我部浮沈の境にして、人々半は盟主の名を失はんことを恐れしの時にして、部員の心情甚だ白金〔明

治学院)復仇前に類せり」というもので、「選手は試業の余暇を偷んで、毎夕練習」した。そして試験終了直後に一高校庭で行われた試合は、一高が11対1で慶応義塾に勝利し、「一週の汚辱」が「是に終」ることとなった。

一高の野球部員にとって、校友の目の前で試合を行い、それに勝利することで校名や校威を発揚することが重視されていたことは確かである。しかし、それでも試験期間中の彼らには、練習時間は2時間が限度であり、学業以上に練習に打ち込むことはなかったのである。

一高の野球部員にとっては、野球と学業の両立こそが重視されていたことを示すエピソードをもうひとつ紹介しておく。上述したように、1896(明治29)年5月の日本初の国際試合で、一高野球部は横浜外人に勝利した。これに際して送られた木下前校長の祝電は以下のものであった。

- 一、臨戦尚不失礼勝而不慢敗而不挫は日本武士道の本意にして第一高校の夙に特色とする所なることを
- 二、吾人少壮青年者は独り技術の点のみならず知識の点に於ても同じく光輝ある全勝を博するの責務あるを記憶されんことを³¹

ここで注目すべきは、木下が「勝而不慢敗而不挫」という「日本武士道」の「特色」とともに、一高野球部員たちには「知識の点に於ても同じく光輝ある全勝を博するの責務」があることを述べている点にある。この試合の勝利は、新聞報道によって全国に知れ渡ることとなるが、それほど重要な試合に勝利したときですら、前校長から野球部員に対して学業を怠ることのないよう注意が促されているのである。一高において学業がどれほど重視されていたかということが、ここでも見てとれよう。

4. 野球部 OB たちの進路

一高の野球部員は在学中、試合や練習を活発に

行った。しかし、一高生として野球に熱中した人々も、帝国大学に進学後はほとんどが野球から離れることとなった。そもそも「一高時代」には、東京帝国大学に野球部もなければ野球用のグラウンドも存在していなかった(野球部創設は1919=大正8年)³²。そのため、大学に進学したOBのなかには、野球部の練習に顔を出して後輩を指導したり、対外試合の審判を行ったりする者もいた。

しかし野球部OBたちにとっても、いつまでも野球にばかり熱中してはられない事情もあった。1908(明治41)年に一高を卒業した野球部員、君島一郎は次のように述べている。

一高野球部選手は卒業して大学に入ったあと一、二年の間はグラウンドに顔を出して後輩選手たちの指導に当たる。

しかし大学へ行って二年三年となるとそれぞれ学業が忙しくなり、殊に工科や医科では実習がはじまる。こうなるとそう頻繁にグラウンドには来られない。³³

大学生となって学業が忙しくなると、いくら野球が好きでも多くのOBは学業を優先した。東京帝大に野球部が存在しなかったのも、そのためであろう。なかには、横浜外人戦に勝利した時のエース青井鉞男のように、大学卒業後に「一高グラウンドに来て投げて見せた腕前は既に見る影もなかつた」と酷評されるほど³⁴、野球から遠ざかるものもいたようだ。baseballを「野球」と翻訳し、日本初の野球の専門書『野球』の著者であった中馬庚は、大学進学後も頻繁に一高野球部の活動に関わったが、それは彼が野球、ないしは一高野球部をこよなく愛したというだけでなく、実習などのない文科(史学)の学生だったこととも関係していると思われる。

彼らが野球よりも学業を優先した理由。それは『校友会雑誌』でも指摘されていたように、彼らは学校を卒業したのち、スポーツではなく自らの学歴や専門知識によって身を立てることを見すえていたからにはほかならない。そして、実際に一高

野球部 OB たちの多くは、自らの学歴を生かしてその後の人生を送ることとなった。「一高時代」に一高を卒業した野球部員 66 名のうち、同窓会名簿に名前のないもの 4 名、職歴不明のもの 9 名を除いた 53 名の経歴は（重複含む）、大学教授 10 名、社長・取締役 16 名、衆議院・貴族院議員 4 名、大臣 2 名、医師 5 名、官僚 12 名などである。これ以外でも校長、技師（長）、弁護士など、管理職や専門職に就いている者が多い³⁵。他の一高生たちと同様に、野球部員も学歴を生かして立身出世を果たし、末は博士や大臣となっていったのである。

こうしたことから、一高内で試験が厳しいというだけでなく、彼らの将来への展望という点から見ても、一高の野球部員たちが学業を放擲してまで試合での勝利を追求することはなかったであろう。なぜなら、それは苦勞して手に入れた一高生という学歴を自ら手放し、将来得ることが期待される労働市場での特権を放棄することにほかならなかったからである³⁶。

明治時代後期に、球界における一高の覇権を可能としたのは、選手たちが熱心に野球の練習や試合に取り組んだことに加え、試験勉強の合間に 2 時間の練習をするだけで対校試合に大差で勝利することができる当時の野球のレベルがあったことは間違いない。一高野球部のプライドの源泉は、学業と野球の両者において「全勝」する点にあり、「一高時代」はそれが可能となる幸福な時代であった。しかし、野球の普及に加えて一高入試が激化していったことで、一高野球部が球界の覇権を維持することは困難になっていくのである。

5. 「一高時代」の終焉

1890（明治 23）年 11 月以降、15 年間にわたって一高は球界の覇権を握り続けていた。しかし、「一高時代」の間にも一高及び一高野球部をめぐる周囲の状況は大きな変化を見せていた。

変化の第一は、通説で言われているように日清戦争以後の個人主義的思潮の台頭を背景として、

一高内で高まった運動部・運動選手批判である。自治寮成立当初、一高生たちは校風の振作を重視して、運動部はそれを象徴するものとしてとらえられてきた。それが 1890 年代の後半になると、寄宿寮内の蛮風や運動部員の粗暴な行動への批判のかたちをとって校風懐疑論や校風批判が『校友会雑誌』に掲載されるようになっていった。1903（明治 36）年の藤村操の自殺は、こうした風潮を決定的なものとした。この後、魚住景雄や安部能成らによって「体制イデオロギー」である校風を批判的にとらえ、個人主義を積極的に擁護する主張が積極的に展開されるようになっていったのである³⁷。

第二の変化は一高の外部にあった。一高は東京大学予備門としての創設当初から、大学に進学するエリート学生の養成機関であり、入学試験は難解であった。それでも、1890 年代半ばまでは、試験問題が難しいことに起因する「絶対的学力不足による試験難」であった。しかし、1890 年代の半ばから全国各地で中学校が増設され、それに比例して中学生や中学校の卒業生が増加の一途をたどる一方で、高等学校の増設は抑制された。その結果、明治 20 年代は 1 倍台を推移していた高等学校の入試倍率が、1899（明治 32）年には 2 倍を超え、1900 年代に入ると 2.5 - 3.5 倍に、1908（明治 41）年には 5 倍近くにまで達するようになった。高等学校入試は、受験生の絶対的な学力を測るものから、他人を蹴落として合格を勝ち取る「零和ゲーム」、ないしは志願者をふるい落とす「排斥試験」となっていったのである³⁸。

しかも、一高はそうした高等学校の最難関であった。1903（明治 36）年、高等学校入試が全校共通問題を用いて行われた。そのときの学校ごとの入試状況を比較すると、一高はすべての部類において合格最低点が他の高等学校 7 校を上回るだけでなく、志願者倍率も最高を記録していた³⁹。明治中期から中高等教育機関が整備され、帝国大学の卒業生の進路が社会的に広まっていったことで、高等学校の社会的威信は不動のものとなっていった。日本社会において、中高等教育を通じたメリトクラシーが確立していったことで、一高は

中学校時代に野球に打ち込んでいた生徒が簡単に入学できるような学校ではなくなったのである。

一高生の思潮と一高をめぐる社会状況が、わずか十数年で大きく変わっていくなか、「一高時代」は終焉を迎える。1904(明治37)年6月1日、2日の両日、一高野球部は早稲田大学・慶応義塾大学(当時は大学を名乗ってはいたが、法令上は専門学校)両校の野球部に連敗する。これにより「天下の人士は」早慶両校が「一高の選手を凌駕する技倆を有すと思惟す」るようになった。一高内ではこれまでの選手たちに対する不満が爆発し、「紛々たる讒謗、轟々たる罵言」が「疾風迅雷の如く」起こった。選手たちは「入学試験の難」や「好選手の乗らざる」こと、修業年限の短縮、第二選手の起用などを敗因としたが、これらはすべて「遁辞」とされ⁴⁰、一高野球部の権威は内外で決定的に失墜することになるのである。

これを境に一高野球部は球界での地位を失う。その後も、早慶両校との試合は続けられるものの、実力的には遠く及ばなくなっていった。この後、一高野球部が両校に勝利するのは、東大医学部教授やプロ野球コミッショナーを務めた名投手、内村祐之が活躍した1917(大正6)年ただ1度だけであった。球界の覇権を失った一高は、三高との定期戦やインターハイなど高等学校との試合に重点が置かれるようになっていくのである。

おわりに

ここまで一高内外の教育をめぐる状況から、一高野球部の活動を検討してきた。一高の野球部員たちは、トップエリートとしての自覚を基盤に、学校のプライドや国家の威信をかけて、野球の試合や練習に真剣に取り組んだ。校友もそうした野球部員たちを熱烈に応援していた。

しかし、一高内では試験が厳しく行われており、落第する生徒も多かった。そのため、重要な試合の直前であっても、試合での勝利のために学業を放棄することはできなかったのである。

さらに、一高在学中は野球にうちこんだ学生も、

大学生になると野球よりも学業を優先するようになっていった。その背景には、帝国大学の卒業生には様々な資格の取得に対する特権や、労働市場における優越的な地位が認められていたことがある。さらに、明治後期の時点ではプロ野球はおろか、企業チームすら存在せず、野球を生活の糧とすることが不可能だったという事情もある。自己の将来のためにも、一高生たちにとって学業は極めて重要なものだったのである。

一高野球部はこうした学業という限界をもつがゆえに、中高等教育の量的拡大に伴う野球部数の増加、一高入試の激化といった要因によって、没落を余儀なくされた。「一高時代」以後の野球部員たちも、一高の野球部であるがゆえに、先輩たちと同様に学業や学歴をかなぐり捨ててまで、球界の覇権奪回に挑むことはなかったのである。

こうした本論文の視角からするならば、日本において勝利至上主義と言える傾向が生まれるのは、野球の大衆化に伴うスポーツの市場の形成、それを背景とした野球と進学・就職の結合がうまれる大正時代中期以降といえよう。これらスポーツと教育をめぐる社会状況の変化については別稿を期して論じることとする。

¹ baseballを「野球」とする訳が日本で定着するのは1900年前後のことで、それ以前は「ベースボール」や「ボール」と呼ばれていたが、本論文では煩瑣を避けるため、引用部を除いて「野球」で統一する。

² 有山輝雄『甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』1997年、吉川弘文館、26-30頁。

³ 有山のほかにも、木下秀明『スポーツの近代日本史』1970年、杏林書院。Donald Roden “Baseball and the Quest for National Dignity in Meiji Japan” *American Historical Review*, Vol.85

No.3, 1980。および、同“School days in Imperial Japan A Study in the Culture of a Student Elite”, 1980, University of California Press (森敦監訳『友の憂いに吾は泣く - 旧制高等学校物語 - (上・下)』1983年、講談社)。菊幸一『近代プロ・スポーツ』の歴史社会学 - 日本プロ野球の成立を中心に - 』1993年、不昧堂出版。日下裕弘『日本スポーツ文化の源流 成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究 - その形態および特性を中心に - 』1996年、不昧堂出版。清水諭『甲子

園野球のアルケオロジー - スポーツの「物語」・メディア・身体文化 - 』1998年、新評論。佐山和夫『日本野球はなぜベースボールを超えたのか「フェアネス」と「武士道」』2007年、彩流社、など。

4 坂上康博『につぼん野球の系譜学』2001年、青弓社。

5 菊前掲『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学 - 日本プロ野球の成立を中心に - 』、90頁。

6 1902年の横浜外人戦の勝利投手。投球練習によって煉瓦壁を破壊したり、練習のしすぎで湾曲した腕を桜の木にぶら下がり伸ばしたりしたという逸話がある。清水前掲『甲子園野球のアルケオロジー - スポーツの「物語」・メディア・身体文化 - 』、130-131頁。

7 木下前掲『スポーツの近代日本史』、111-115頁。

8 有山前掲『甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』、32-39頁。清水前掲『甲子園野球のアルケオロジー - スポーツの「物語」・メディア・身体文化 - 』、141-144頁。

9 文部省編『学制百年史』1972年、帝国地方行政学会、218頁。

10 同上書、339-340頁。

11 同上書、369頁。

12 同上書、162頁。

13 森有礼「仙台区有志寄附者二対スル説示」、および、同「明治廿年六月廿一日文部大臣宮城県庁二於テ県官郡区長及学校長へ説示ノ要旨」、大久保利謙編『森有礼全集 第一巻』1972年、宣文堂書店、527、537頁。

14 寺崎昌男・成田克矢編著『学校の歴史第4巻 大学の歴史』1979年、第一法規出版、98頁。

15 文部省『文部省第十五年報』1889年、文部省、44頁。

16 安倍能成『我が生ひ立ち』1966年、岩波書店、347-348頁。

17 坂上前掲『につぼん野球の系譜学』、59頁。

18 日下前掲『日本スポーツ文化の源流 成立期におけるわが国のスポーツ文化の研究 - その形態及び特性を中心に - 』、28-30頁。

19 『校友会雑誌号外 野球部史附規則』1895年、第一高等学校校友会、復刻版1980年、ベースボールマガジン社、1頁。

20 宮坂広作『旧制高校史の研究 一高自治の成立と展開』2001年、信山社、173-174頁。

21 坂上前掲『につぼん野球の系譜学』、32-33頁。

22 「ベースボール部雑記」、第一高等学校校友会編『校友会雑誌』、復刻版2006年、近代日本文学館編、DVD-ROM版、23号、1893年1月、39-40頁。

23 前掲『校友会雑誌号外 野球部史附規則』、10、

14-16頁。

24 「横浜遠征記事」、第一高等学校校友会編前掲『校友会雑誌』58号附録、1896年6月、4頁。

25 数奇庵主人「試験に就きて」、同上誌65号、1897年3月号、27頁。

26 「野球部報」、同上誌126号、1903年4月、89頁。

27 井原外助「我国野球の幼年時代の思出」、木村編前掲『明治文化資料叢書 第十巻 スポーツ編』、242頁。

28 長与又郎博士記念会編『長与又郎伝』1944年、日新書院、77頁。

29 片山義勝「死馬の骨(対外試合)」、第一高等学校校友会編前掲『校友会雑誌』95号、1900年3月、15頁。

30 以下1893年の慶応義塾戦の叙述については、「ベースボール部報」、同上誌29号、1893年9月、91-99頁。

31 前掲「横浜遠征記事」、5頁。

32 都築俊三郎編『東京大学野球部史』1975年、一誠会、1-2頁。

33 君島一郎『日本野球創世記』1972年、ベースボールマガジン社、80頁。

34 辰野隆・辰野保『スポオツ随筆』1932年、大畑書店、9頁。

35 勝田一編『帝国大学出身名鑑 1-3巻』1932年、校友調査会、復刻版2003年、日本図書センター。全国旧制高等学校野球史編集委員会編・発行『全国旧制高等学校野球史』1981年。『第一高等学校野球部名簿』1982年。『第一高等学校同窓会名簿』1995年。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』2002年、東京大学出版会。なお、一高野球部員の経歴の調査にあたって一高同窓会事務局長、兼重一郎氏に御助力いただいた。

36 当時、帝大の卒業生は司法官、弁護士、医師、薬剤師、中等学校教員等の資格を無試験で得ることができた。天野郁夫『学歴の社会史』1992年、新潮社、復刻版2005年、平凡社、272頁。

37 宮坂前掲『旧制高校史の研究 一高自治の成立と展開』、115-208頁。

38 竹内洋『立志・出世・苦学 受験生の社会史』1991年、講談社、73-77頁。

39 神立春樹「明治三十六年度全国高等学校入学試験状況 - 旧々山口高等学校の進退窮まれるを見る - 」、『岡山大学経済学会雑誌』27巻1号、1995年6月、岡山大学。

40 出羽八郎「中野武二君に与へて野球部を論ずる書」、第一高等学校校友会編前掲『校友会雑誌』139号、1904年10月、47頁。